

七夕と盆行事

水の視点から

The Tanabata and Bon Festivals :
A Study from the Perspective of their Relationship to Water

関沢まゆみ

SEKIZAWA Mayumi

- ① 生と死と水
- ② 一年両分性と朔望上弦下弦のリズム
- ③ 7月7日の民俗伝承
- ④ 7月の行事の特徴:「くり返し」
- ⑤ 本稿の論点

【論文要旨】

民俗学研究において、「生と死と水」という観点は折口や柳田以来論じられてきているところである。それは人間の生死と水の認識や感覚が密接な関係にあると考えられてきたからといえる。本稿は、その水に深くかかわる七夕とお盆という精霊・霊物に関係する7月の行事について、その後の研究動向をも視野に入れて、盆行事の全体的な枠組みでの把握と整理を試みるものである。これまで七夕や盆の行事について水神という特定の神格を与えてその祭祀であると単純化する傾向が続いてきている。しかし、民俗学の研究蓄積からいえば、柳田と折口の1年のめぐりを一年両分性と朔望上弦下弦のリズムでとらえる視点、また年中行事の根本に「くり返し」の論理をみるという視点、つまり1年間の行事を個々の行事としてそれぞれを解釈するのではなく、個別と全体の関連性という、いわば年中行事の構造に注目して分析する視点が重要であることをあらためて確認し、7月の場合も全体を盆の月として見直す。第一に、7日の水に関する行事（ねぶり流しなど）は、お盆の前の雑霊祓えと精霊迎えを前にした吉事祓えの意味が強いことが明らかになる。折口の想定したように、水の行事は水神の祭祀というのではなく、七夕に来訪する神を待つ、来たるべき吉事を待ち望むための潔斎としての吉事祓え、禊ぎの水という意味が、現実の民俗伝承の中からはよく見出せるのである。第二に、水と関係の深い棚機津女の貸小袖の伝承が、広く今でも日本各地に伝えられているが、その七夕着物と七夕人形という習俗に加えて七夕馬についても東西に特徴的な分布がみられることが確認できる。そして、七夕着物の伝承には神を待つ棚機津女の意味、七夕人形と七夕馬の伝承にはお盆の精霊迎えの前の吉事祓えとしての禊ぎ祓え、雑霊祓えのための形代としての意味、という2つの意味をもちながら七夕の行事は伝承されているということが指摘できる。

【キーワード】 七夕と盆行事, 「くり返し」の論理, 吉事祓え, 七夕着物, 七夕馬